

武蔵野日曜聖書講筵

神の護り

――詩篇第121篇――

1975年10月26日

小池辰雄

わが救助はヤーヴェーより 汝の守護者はまどろみ給わない 汝の魂身を護り給う 運命と信
仰 柔軟心と金剛心 内接円関係 護り本尊が自分の中に来ている 神に護られ、人を護る
祈り

【詩篇121】（私訳）

宮のぼりの歌

1 「私は眼をあげるあの山々に。

どこから来るかわが救助。

2 わが救助はヤーヴェーからだ、

天地の創造主なる。」

3 「彼れは汝が脚を蹠踉に棄ておかじ、

汝が守護者は微睡給わじ

4 見よ！ 微睡まず、また熟睡り給わず。

イスラエルの守護者は。

5 ヤーヴェーは汝の守護者、

汝の翳にして汝が右手の方にあり。

6 昼は陽、夜は月をして

汝を撃たしめず。

7 ヤーヴェーは汝を護りて

すべての禍害をまぬがれしめ、

汝が魂身を護り給わん。

8 ヤーヴェーは汝の出づると入るとを護りて、

今から永遠に至らん。」

●わが救助はヤーヴェーより

「宮詣での歌」という歌集があつて、これはその中の一つです。

「われ山に向かいて目をあげ」



というわけですが、原語でいうとこれは複数になっている。

「エッサー エーナイ エル・ヘハリーム」

と。「山々」という。どういう山々をさしているかわかりませんが、イスラエルはちよつと見上げると、すぐ山が見えるわけで、これが詩篇87篇の、あるいは125篇にあるシオンの山かも知れませんし。「シオンの山」というときは、ヤーヴェーの御座のあるところという気持ちも、比喩的には含まれるわけです。「イスラエルの山々」という言い方がエゼキエル書6章2節にあります。あるいはヘルモンの山、バシヤンの山、まあいろいろありますけれども、これは巡礼の「宮詣もうでの歌」となっているので、大体シオンの山で、それを荘嚴の複数で言つたというような気持ちにとつていいかと思います。もちろん、

「故里の山は非常に慕わしい」

という――啄木の有名な歌にもあるように――詩人はそういった角度からうたつたかもしません。この詩篇として使われているのは、宮詣での歌として使われているわけです。

1 「自分は目をあげる、

目をあげるという、その通りの言い方です。

かの山々に向かつて。どこから来るか、わが救助たすけは」

これは問答になつてみるとみていいわけで、自問自答とみても結構なんです。そうすると、問答体にもみる学者も幾人かいるわけです。そうすると2節は、

2 「わが救助たすけはヤーヴェーよりぞ、天地の創造主つくりぬしなる。」

「わがたすけは」というのを「汝の助けは」と。

「わがたすけはどこから来るか」

と言う巡礼者の問いに対して、

「汝のたすけはヤーヴェーからである。天地のつくり主からだ」

と、祭司がそういうように答える。

詩篇は、あるいは、そういうような問答体で使われたかも知れません。しかしテキストとしてはやはり「わがたすけはヤーヴェーより」で、私はテキストのまんまで結構だと思つてます。自分で問いかけるようにして、いや実に

「わがたすけはヤーヴェー、天地の創造主であるところのヤーヴェーから来る」

と。「天地をつくりたまえる」というこの「つくる」という字が創世記の「創造する」という字とはちよつと違う。正につくるという「アーサー」「造る」と言う言葉ですけども、「バラー」「創造する」という字ではない。天地のつくり主なるヤーヴェーからと。

●汝の守護者はまどろみ給わない

3 「彼れは汝なが脚あしを蹠よつめぎに棄ておかじ、

汝が守護者は微睡まもりて まどろみ給わざれ。



3 節から一番終わりまで、これがみんな「汝」になっていますね。自分のことを汝という言い方もあるわけで、そうすれば全部、これはその作者が「われ」といつて、そして今度は自分に呼びかけて「汝」と言っても一向差支えないし、それからまた、別な声として「汝」とみてもいい。詩というものはいろいろに、両義的にとつて差し支えないわけですから。論理的に言う人は、1 節と2 節が別な人が言つて、3 節がまた今度は自分が言う。それだから、

「彼れは汝が脚を蹠跟に」

というのは、「彼わが足をよろめきに」と一人称に変えてしまうといったような見方をする人もありますが。まあそうしなくてもいい。一人称と二人称では語尾が、相当かたちが違いますからちよつと無理です。

「脚を蹠跟に棄ておかし、汝が守護者は微睡給わざれ」

「棄ておくようなことがないように」と、禁止の願望、あるいは命令の「アル」という字です。この3 節はそういう意味です。

「汝の足をよろめきに棄ておかないように、汝の護り手は微睡み給わないように」

と。もう少し強くいうと、「たまわざれ」と私は訳したけれども。

それで4 節になりますと、今度ははつきりと「ロー」という字が使つてある。同じ否定でも、さきの（「アル」）は禁止の命令、願望の方ですけれども、こちらは禁止の断定です、否定です。詩篇の1 篇に、

「偽りの座にすわらず」

と三回書いてありますね、あれはみんな「ロー」という字です。それからモーセの十戒の

「汝殺すなかれ、姦淫するなかれ」

と、あれはみんな実は「ロー」なんです。だから私は、

「汝は殺さない、姦淫しない、盗まない」

と、むしろ断定的な言い方だと言いたいわけです。「アル」は禁止、願望です。

4 見よ！ 微睡まない（ロー・ヤーノフ）

というのですから、微睡まない、また眠らない。仮睡もしなければ熟睡もしないというわけです。両方とも強い「ロー」という字です。だから、

4 見よ！ 微睡まず、また熟睡り給わず。

イスラエルの守護者は。

と。この詩篇には「護る」という字がたくさん出てくる。「シャーマル」という字ですが、「護り手」のときは「ショーマール」と言います。「ショーマール」というのは「護る者」という名詞的な形で、現在分詞なんです。わがショーマール、われを護り給う者。

それから、「眠る」というのは、もちろん精神的にぼやぼやしていることが「眠る」とい



うわけです、「まどろむ」とか「眠る」というのは。居眠り運転なんてのはこの「微睡む^{まどろ}」方です。仮睡もしなければ、熟睡もしない人。よく目覚めておられると。逆に言うと、神は目覚めている、覚醒しておられる、「覚者^{さむるもの}」である。

● 汝の魂身を護り給う

⁵ ヤーヴェーは汝の守護者^{まもりて}、

汝の翳^{かげ}にして汝が右手^{めでて}の方にあり^{かた}。

朝日は東から出ますね、朝日に向かって右手という意味なんです。そうすると南方にあるということです。灼熱の陽が南から照ってきますから、神さまはその灼熱の日を——砂漠の太陽はすごいですね——そちらの南の方に立って陽の陰になってくださると。ちようど木陰に宿るように。やつぱりイスラエルは暑いですから、三月でも泳いでますから、亜熱帯地方です。そういう砂漠の経験からこういう言葉が出てくるわけです。

「汝が護り手、汝の陰にして」ということは、「陰となつてくださる」と。南に立って、「汝が右手^{めでて}の方にあり^{かた}」ということは、陰になるためには、右手即ち、南方に立ってくださるからと。

⁶ 昼は陽、夜は月をして汝を撃たしめず。

日射病です、「ひるは日」とは。夜は月射病の方。アフリカやアラビアの方では、砂漠で起こる一つの現象で、月の何かがあるらしい。そうすると一種の精神病にかかるらしい。だから、日の炎熱にも、夜の妙なす気味悪い——だいたい青い光というのはあまり感じよくない——「汝をうたず」と。

⁷ ヤーヴェーは汝を護りて

すべての禍害^{わざわい}をまぬがれしめ、

汝が魂身^{いのち}を護り給う。

「汝の魂身^{いのち}」と私が訳したのは、むしろ魂と身の両者の気持になる。「ネフェシュ」という字ですから、これは「ソウル」(魂)と「ボディ」(身)と両方をひつくるめた気持です。「ソウル」が同時に「命」の意味にもなるので、私の訳文では「魂身」と訳した。これで魂身と読む。魂とからだ。「霊」という字は「ネフェシュ」でなくて「ルーアツハ」という字です。「ソウル アンド ボディ」ですか、「汝自身」なんていう時の「自身」という言葉がやはりこの「ネフェシュ」という字を使うことがある。

⁸ ヤーヴェーは汝の出づると入るとを護りて、

今から永遠^{とこしえ}に至らん。

「出づるも入るも、神さまは護る」

という。まあそれが一応の文字のうへの訳の解釈であります。



●運命と信仰

我々のこの人生には、いろいろな外的な困難、患難、それから内面的な悩み、苦しみ――苦難、苦悩――これを経験しない人はないわけです。いろいろなお守りの札だとか、護符ごふなんてのがあるわけです。それからいろいろ吉凶を占つてもらったり、いろんなことがある。私は易えきもすこし勉強してみたいと思うけれども。いろいろ人間の法則があるんだよね。引越しの方角がどうのこうの、いつがいいだとか、ああいうことは必ずしもバカにならない。とにかく、いろいろなデータから法則が考えられる。霊的な感覚のある人がやはり似たようなことを言うから、決してバカにはならない。

そういうわけでありますけれども、この「神の護り」、我々が信ずる神の護りというのは、どういう人生の波がきても大丈夫。運命の波というのは高い時と低い時と、まあいろいろあります。

「運命の波の低いときにはじつとしていろ。上昇カーブのときは大いに積極的にやれ」

というようなことが言われます。そういうようなことを聞くことも一応参考にはなる。ただし、それを宿命的に考えてはいけない。その「十干十二支かん」と生年月日、姓名判断とか、いろいろなものを聞いてみると、なかなか正直、当たる場合がかなりあるんだよね。だから、ばかにならないと言っている。

けれども、宿命的にそれでおしまいというように考えたら、これはいかん。何事も例外はある。また例外でなくても、この法則に対してもうひとつ別な法則がある。それは信仰の世界の霊法の世界。霊法の世界に対する心は柔軟の心です。「柔軟心」、あるいは無きこころ、「無心」ということ。

いつかも言ったでしょ。海で「どうも私は船に酔います」というが、波が高くなった時は自分の気持ちをグーッと上げる。低くなった時は自分の気持ちを低くする。それに即していく。それに柔軟にに応じていく。抵抗してはいかん。柔軟にに応じてこれを制していく。柔軟な心で相手を制して制御していく。そのこつが分かってくると、これはパウロが言っている通り、

「一切の秘訣を得たり」

となる。苦しみにも、悩みにも、悲しみにも、喜びにも、有るにも、無きにも、そういった運命の一切の運命に対して対処することができる。

●柔軟心と金剛心

その柔軟な心でそれに応じながらなぜ勝てるかというところ、今度は内側に「金剛心」がなくてはいかん。柔軟心と金剛心は矛盾しない。たとえば、これはダイヤモンド。ダイヤモンドは何物よりも固い。何がきてもこれは崩れない。ダイヤモンドと豆腐だね。また、



火と水。火と水が矛盾しないんだ、この霊の世界では。聖霊はある時は火と言い、ある時は水というでしょ。不思議なんですよ。

この金剛心というのはどこから来るかというと、それは御霊なんです。それから、柔軟心もどこから来るかというと、これも御霊から来るんです、どっちも。金剛心と柔軟心は即ち剛と柔、静と動。柔、剛、一、如、静、動、一、如という。これは御霊から来る。だから、人生の諸々の患難、辛苦、苦悩、喜び、悲しみ、何でもいい。何でもござれと。これに対処していける。これは即ち、この金剛心、柔軟心を持つところの御霊をしつかりもつ。

「神の護り」

と言いますけれど、神の護りをただ外的に、

「神さまは護る」

くらいの気持で言ったってダメなんです。神さまの護りはどうして受けるか。自分の中に御霊をいただいて、そして金剛心、柔軟心となる時に、神の護りを本当に受けとることができる。そうでないというと、

「さあ、神さまはどうも護ってくれなかった」

とかいう。それは神さまは護るんだけど、こちらの心の受け方が悪い。

そうすると時には外的な患難も押さえてしまうことがある。運命環境を変えることもできる。従いながらそれを変えることもできる。それは御意のままに動いていくから。決して、

「こういう場合はこうだ、ああいう場合はああだ」

なんて、そんなことを決めるわけにもいかん。法律というやつは何でも決めてかかるけれども、そうすると今度は、いろいろな無理が生ずる。一体、法とは何かという、法哲学を本当にやらなくてはいけない。

なるほど神さまの護り方、力の表し方は、

「お前はその時には剛で行け。この場合は柔で行け」

という神さまの護りの声が上から来る。

そういうことで、神さまはどこなところも突破させてくださる。それを本当にやったのがパウロさんです。パウロが諸々のあの伝道の患難でいくたび彼は死にそうになったかわからない。それでもなお彼は護られていたというのは、彼は本当に柔軟心と金剛心を御霊においていただいているから、護られていった。最後は自分の命を神のために献げる殉教となりましたけれども。

神の護りというものはそういう質をもって、そういう角度から受けとっていかないと。そうすると、護符は、護り札ふだはいらない。護り札はまさに御霊が護符であります。これを内に宿している。そうすると正直、現実にもいろいろ不思議なことが起きて、間髪をいれざる時に、不思議な瞬間に助けられたり、何か不思議なものによって被われたり、ということがあるわけです。



●内接円関係

何といつても失つていけないのは、この神との交わりです。

「神―キリスト―我」

この内住関係、内接円関係。この内接円関係の事態がいつも現実となっている。護られている。本願の効力が来ている。神さまの本願はいつもわがうちに来ている。その角度の捉まえ方が大事なんです。

「われ山に向かいて目をあぐ。いずこより助けは来るか」

なんて言つて、外を見ていたつてダメなんです。天地を創造した神さまは――もうひとつ、あなた方はその先の答案を書けるかね――我をつくりたまひし神。天地創造といって外側ばかり見てもダメ。神さまは天地創造の最後に、私を、人間をつくつたではないですか。この私をつくつてくださった神さまが護らないわけではない。それが本当の信仰なんです。

何のために護つてくださるんですか。私の幸福のためですか。そうじゃない。神の栄光のため、神の神らしさがそこに本当に表れる。わが存在は一切、神においてある存在。私たちは神につくられている。お父さん、お母さんから出てきたけれども、一番本源的な意味においては、質においては、神につくられている。それは無理やりにそう思うのではないですよ、本当にそうなんです。神につくられている。「ひと」とは

「神霊が止まる、^{ひと}霊止」

と書く。今度は――止まるどころのさわざではない――霊によつて浸透されている。頭の先から爪先まで。これは神の創造、神品なんだ。それがいろんな人間のまちがった在り方、やり方、神なき文化文明の公害現象、そのことで傷めつけられている。また自分の自我というやつが本当の自由の妨げになる。それがどうにもならないから、キリストがとうとう贖つてくださったわけですよ。神につくられたものらしく、その元の形に、すがたに、質に回復してくださった。パラダイス・リゲインド（樂園回復）ということにしてください。これがこのキリストです。だから、神に護られているということは、「神は護る」ということは正に神の必然のこと、神さまの必然の意志です。

「大丈夫だよ」

と。そういうように神に護られて、最後には地上から天界にいくのさ。地獄に落とすのではない。護つて天界に上げてしまう。

●護り本尊が自分の中に来ている

この詩篇は、もちろん「宮詣での歌」ですから、シオンに向かつて目をあげて、そっちの方に巡礼して行く。けれども、イスラエル巡礼ばかりやっていて、何かイスラム教みたいに本山の方を、メッカ、メジナというようなことでもつて、もしやっていたら、それ



はちよつとちがう。イスラエルへ行つて悪いという意味ではないよ、悪くはないですけども。それはキリストがちゃんと云つてらっしゃるんだから。

「ゲリジムでもなければエルサレムでもない、いずこに於ても神を拝する時が来る。今すでに来ている」

とキリストは言われた。至る処せいざんこれ青山あり、至る処これ神の山なり。

「目を上げてみたところが自分は山の上にいた」

というようなわけだ。山はどこにあるでしょうか、足下にあつたと。私は読んでいるうちに、だんだん図太くなつて困るけれども。聖書から離れちゃう。「離れちゃう」というのは、聖書突き抜けちゃうわけです、文字の奥を読むから。

この天地創造の神さまは——もちろん私たちは、大自然と融合する気持は持っています。大自然は我々の庭だから——私たちの脚もよろめかさないし、絶対に棄てないと。

「イスラエルの守護者」

というのは、これは我々の詩篇として読めばそういうことになる。炎天下でも、昼間でも夜でも。それから、敵が来るし、悪者が来るし、猛獣がやって来るし、そういうのからみんな護つてくださる。

ということは、「南無妙法蓮華経!」「南無阿弥陀仏!」と称えれば、猛獣も食つてかからない。獅子もなついでしまふ。ヒエロニムスなんてのはそういう聖者でした。アッシジのフランチェスコとかもそう。本当にこちらが御霊に満ちて、

「キリスト!」

と称えれば、サタンも退く。ですから、本当に護られるためには、自分自身のうちに本当に護り本尊が来てなければダメだ、護り本尊が自分の中に。自分の中に護り本尊が来てなかったら、この「南無阿弥陀仏」も「南無妙法蓮華経」も力がないわけだ。第一流の坊さんたちが、ただ一言そう言えば苦難を逃れた。日蓮が「南無妙法蓮華経」を称えれば、斬ろうとした奴がぶつ倒れてしまふ。

どうぞ、そういうことで、いろいろな運命環境の法則をばかにしてはいかんけれども、それに囚われて負けてはいかん。いいですね。

それが即ち、さつきから申し上げている、御霊に於けるところの柔軟心と金剛心であります。人間は相対的には弱い者です。いわゆる精神も、いわゆる肉体も、疲れたり、迷ったり、まあいろいろです。けれども、

「もう一つ奥の世界にいつも、如何なる時にも、何処に於ても、直ちに入れる」という事態は、この深い祈りの世界をいつも持つているということです。

●神に護られ、人を護る

1840年11月17日の朝まだき、その父との生別を期し、心をこめて、正にこの詩篇121



篇と135篇を朗読し、且つ祈りし一青年があつた。彼はその朝グラスゴウを出帆し、暗黒の大陸に福音をもたらすべく船出した27歳のリビングストン(1813〜1873)であつた。

リビングストンはアフリカへの旅の時に、この詩篇121篇と135篇をお父さんと読んでお別れしている。それでおしまい。このリビングストンも非常な患難に会いまして、ある時は獅子に襲いかかられた。もうちよつとのところで獅子に裂かれてしまうところだった。獅子がリビングストンの肩に飛んできて爪をかけた。正に間髪を人れず、その瞬間に土人が獅子を射殺してくれた。

「使命のある限りは神さまは護ってください」

と、その体験の後で彼は言つたそうです。ザビエルにしたところで、みんな御霊の祈りの世界で護られつつ自分達の使命を全うしたわけです。使命ある存在。我々の存在は使命がある。ただおもしろおかしく暮すために生きているんじゃない。存在が即、使命です。

どうぞ皆さんは、この福音を受けたらば、とにかくこの生命を、この喜びを、この力を、人に分け与えないではいられない。それが使命です。福音は福音すること。身をもつて人にそれを与えて行くということが、存在がそのような使命です。今度は、人を護り、人を助け、人を救う。ヤーヴェーの護り、神の護り、キリストの護りが、自分を護るのは何のためか。「神の栄光のため」ということはどういうことかという、人を救うことによつて、人を護ることによつて、人の陰となり、木となつてその陰を宿すような人。泉となつて人の渴きをうるおしてあげる人。暖炉となつて人を暖めてあげる人になることです。これが即ち、我々が護られることの、何故に護られるかという、今度は逆に転換して、人を護る人となること。もう詩篇121篇を越えてしまうわけです。

私はこの旧約の詩篇は好きなんですけれども、御霊の世界に入ってきたらやはり詩篇もちよつと物足りなくなってきた。何か欠けているということとは、やはり旧約の限界なんです。何と言つてもキリストの霊の世界、新約の世界は、結局一つの言葉で言えば愛ですけども。愛するということは本当に人助けをするということ。自分を捨ててかかるということ。そういう魂になればなるほど、神さまは限りなくその人を強くしてください。また人の思いにすぐる喜びが来ます。また神の栄光が現われてきます。

詩篇121篇の神の護りは、わが内に神を宿す、キリストを宿すことに於て、御霊を宿すことによつて、柔軟心、金剛心となつて、一切に対処し、かつまた、この柔軟心、金剛心をもつて人を助けていく、人を護つていくというところに、人の本当の渾然たるところの構造とその内容があると思います。

●祈り

永遠に在りて、在らしめて在り給うところの、まことのおん神さま。

イスラエルの無名の詩人が詩篇121篇をつくりました。彼の人生体験からあなただけが本



当の護り手であると、あなたのおん護りはいかなる運命環境にもかかわらず、いかなる難にもかわらず、いよいよ深く我々を荷ない救いあげてくださるところのおん護りであることを、キリストに在って私たちははつきりと受けとり、感謝であります。

「われ山に向かいて目をあぐ」

と。きたるべきところの新天地の山に向かつて目をあげます。あなたのつくり給うところの新天地の世界において、私たちが置かれるところは何処であるか。その終末的な大希望をもつて進んで参ります。この過ぎ行くところの世の中において、いよいよ信仰の失われたところの、神中心であるべきものが人間中心になってしまっているところの、この滅びへの恐るべき20世紀において、私たちはどこまでもこの信仰を貫き、信仰より信仰へ、恵みより恵みへ、汝の護りより護りへ、栄光より栄光へ、使命より使命へ、人助けより人助けへと、神さま、いよいよ私たちはあなたの御霊の柔軟心と金剛心によって自由自在に、

「一切の秘訣を得たり」

とパウロは言いましたが、そのような事態が次第次第に開示されて体験されつつあることを感謝いたします。

一切は御名のゆえであります。福音のゆえであります。感謝であります。どうぞ、この兄弟姉妹たち、まだ人生の春秋に富んでいます、この人生を、これから20世紀に何が起こるか知れませんが、

「キリストわがうちに在りたもう。われキリストのうちに在り」

との、この現実を平常から常に常燃の火として燃やし、そしてこれに対処していくことができますように、いよいよ我々をおん鍛えくださらんことを願ひ奉ります。

「主イエス・キリストのうちにいまし給うところ、これ平安なり、これ幸福なり」

と。その他の一切のことはどんなに幸福そうにみえてもダメであります。また、どんなに平安そうにみえてもダメであります。ただこの一点だけは、私たちが絶対に失ってはならないところの事態であることをいよいよ身をもって体験していき、また日に日に進んで行くことができますように願ひ奉ります。

詩篇121篇を学びながら、121篇を更に天的な光をもって、神さま、あなたが示してくださいったことを感謝いたします。まことに主イエス・キリストの御霊、御言はなんと無限無量なるかなであります。今、兄弟姉妹たちの心にあふれる感謝と讃美と祈りとともに御名により献げ奉ります。アーメン。

〔註：小池辰雄著作集第4巻『詩篇珠玉集』所載の「第121篇 神の護り」はこの講筵を基に書かれたもの〕

